

# 「対話」で、議会と市民の関係を変えよう！

——市民と議員の条例づくり交流会議がワークショップ開催

ガバナンスフォーカス Governance FOCUS

市民と議員の条例づくり交流会議は3月17日、都内で「市民と議会の対話をどうつくる？——『対話』は議会と市民の関係を変える」と題したワークショップを開催した。議会改革の次のステージに向け、対話の手法を身につけようというのがねらい。ほぼ4時間にわたって話し続けた参加者からは対話の重要性を再認識するとともに、議会での活用を模索する声が相次いだ。

## 議会と市民の「すれ違い」

今回のワークショップには約100人の自治体議員や市民が参加（ほぼ6割が議員、4割が市民）。冒頭、代表運営委員の一人である廣瀬克哉・法政大学教授が「議会の『カタオモイ』——改革の次のステップに向

けて今の現実を見つめよう」と題してワークショップのねらいを話した。廣瀬教授は、北海道栗山町議会が2006年5月に議会基本条例を制定して以降、市民と議会の条例づくりには、「議会という場 자체」をまず改革の対象にしようと焦点が定まつたと指摘。議会基本条例の制定議会数は、昨年12月現在で全自治体の2割を超える360に達し、この3月で約400、パブリックコメント中の議会を含めると500という数字が視野に入ってきた、と急速に広がっている状況を説明した。

議会における附属機関設置に見ら

れて、「法律の想定外は違法」「法律の想定外は任意」と法解釈が進化し、通年議会や本会議での参考人招致・公聴会、専門的意見の活用など法制度上の整備も進んでいた。だが、市民の議会に対するイメージは変わらないという現実があると強調。議会側は改革に取り組んでいると思っていても、市民側からは「議員が頑張り始めているらしいが、改革が市民にとってどんな成果があったのか分からぬ」という評価で、それが端的に表れているのが議会報告会だと指摘した。

議会報告会について、議会側が「機関としての議会としての説明が大切」「多くの市民に集まってほしい」と考えているのに對して、市民側からは、「決定した事後報告よりも決める前に聞いてほしい」「決まりごとにならわざわざ時間を割く価値が感じられない」……という状況が見られ、参加者が先細りになつているのではないかと話した。

こうした議会改革の躍り場的な状況から次のステップに向かうには、成果志向の改革が必要であり、そのためにはコミュニケーションの方として対話の手法が有効ではない



「議会の『カタオモイ』」の現状について話す代表運営委員の廣瀬克哉・法政大学教授。

かと指摘。「議会と市民」「議員同士」において対話の手法を身につける必要性を述べた上で、「議員は政治的なキャンペーンは得意かもしれないが、コミュニケーションの手法は未熟ではないか。対話の手法によって成果を生んでいくことが次のステップにつながる。そして成果を実感できる政策論を交わすことができるのはどうかが課題だ」と話した。

## 「対話」＝「聞く」×「話す」

続いて日本ファシリテーション協会フェローの加留部貴行氏（九州大学客員准教授）のコーディネーターであるワークショップが始まった。

加留部さんはまず、地域でも職場でも対話や雑談がない現状を指摘。

いろんな苗を増殖する。  
じつは、そんなワザも  
もつてます。



日本製紙株式会社

東京都千代田区一ツ橋1-2-2 〒100-0003  
TEL.03-6665-1111 www.np-g.com/

## 助詞をキーに「市民」「議会」の関係をスピーチ

最初は「回想」（タイムライン）。これは、活動を始めてからの自分の気持ちを曲線で描くもの。縦軸は0を真ん中に「+」と「-」、横軸が時間の経過を示す。議員は「議員にな



ジョイントスピーチでは、「市民」「議会」を結ぶ助詞を任意で選んで語り、聞く体験を行った。

I'm  
ニッポン！  
紙の未来へ—日本製紙のバイオ技術。

ガバナンスフォーカス Governance FOCUS

5年後の市民と議会は  
どのような関係に  
なっているでしょうか



テーブルごとに5年後の「市民と議会の関係」を話し合う参加者。

イムラインを紹介し合った。

次は3人一組になる「発掘」(ジョイントスピーチ)で、テーマは「市民・議会」の関係を考える。カードに書かれた10の助詞を任意で選び、それぞれが「市民・議会」について思っていることを話すというもの。

1人が話し手、2人が聴き手で、話し手が3分間話したら、聴き手に対する背中を向け、聴き手は話し手の話について感想を2分間話し、最後に3分間みんなで話をする(役割を変え、3人が順に話し手になる)。助詞は全部で10種類。かなり無理があるような助詞でも、問わず語り

5年後の  
**市民と議会の関係は?**

その次は、4~5人が一組になった「同化」(リーダーズ・インテグレーション)というワーク。各グループの参加者のうち1人の議員が5分間、議会改革に対する所信を話していく。他のメンバーは所信を聞いて「理解できたこと」「もつと知りたいこと」「期待すること」「自分が貢献できること」を付箋にして模造紙に貼る。議員が戻ってきたら、付箋の意見に対して順次回答し、意見交換するという

「あっちでは、改革が進む議会とそうでない議会の格差が広がる、という話が出ていた」などと話すこと、で、「アイデアや良い意見が広がっていく。最後に、「市民と議会の対話を進めていくためにあなたは何ができますか」という問い合わせをする

答えを模造紙に記入。自分のテープ

局を担つたことだ。プロジェクトチームの取り組み状況を発表する「ミニフォーラム」が行われた。第3期は、部会ごとの議論を中心とした。若者中心でファシリテーションのノウハウを持つ前者と、まちづくりに関する経験豊富なメンバーが集う後者。双方の強みを生かし、期待どおりの効果が生まれた。

「対話」の手法を採り入れた実践が、視化が大事だと感じた。「対話によって信頼感が高まっていく。市民の議会に対する垣根を低く、信頼感は高く、をめざしたい」など刺激を受けた様子。また、ある市民は「地域課題の把握に今回の手法を使ってほしい。市民と議員が対話し、議員は課題を構造化していってほしい」と感想を話していた。

(本誌/千葉茂明)

の中から、自分の言葉で話すようになり、背中で聴くことで相手がどのように自分の話を受け止めているかを知ることができる。

あるグループでは、「も」を選んだ議員が「市民も議員も協働で民主主義を進めていくことが大事。行政は市民協働を進めているが、本来は市民代表である議会が行うべき。市民も議員が市民代表である認識を高めるべき」などと話し、「が」を選んだ元町職員は「住民代表機関は議会。住民と議会が双方向の回路を持つべきだ」などと話していた。

あるグループでは、「議会全体がチーム議会」になっている。「選挙の投票率が上がっている」などの一方で「5年じや変わらない」という指摘も。別のグループから戻つて、「あっちでは、改革が進む議会とそうでない議会の格差が広がる、という話が出ていた」などと話すこと、で、「アイデアや良い意見が広がっていく。最後に、「市民と議会の対話を進めていくためにあなたは何ができますか」という問い合わせをする

答えを模造紙に記入。自分のテープ

視化が大事だと感じた。「対話によって信頼感が高まっていく。市民の議会に対する垣根を低く、信頼感は高く、をめざしたい」など刺激を受けた様子。また、ある市民は「地域課題の把握に今回の手法を使ってほしい。市民と議員が対話し、議員は課題を構造化していってほしい」と感想を話していた。

「対話」の手法を採り入れた実践が、視化が大事だと感じた。「対話によって信頼感が高まっていく。市民の議会に対する垣根を低く、信頼感は高く、をめざしたい」など刺激を受けた様子。また、ある市民は「地域課題の把握に今回の手法を使ってほしい。市民と議員が対話し、議員は課題を構造化していってほしい」と感想を話していた。

(本誌/千葉茂明)

最後は「共有」(ワールド・カワエ)。「5年後の市民と議会はどのように関係になっているでしょうか」という問い合わせに、それぞれが模造紙に記入して意見交換。20分ほどでホスト1人を残し、他のメンバーは席替えし、新たなメンバーで先ほどまでいたグループで話し合っていた内容を披露し合い、最後に再び元のグループに戻つてくる。

あるグループでは、「議会全体がチーム議会」になっている。「選挙の投票率が上がっている」などの一方で「5年じや変わらない」という指摘も。別のグループから戻つて、「あっちでは、改革が進む議会とそうでない議会の格差が広がる、とい

うでない議会の格差が広がる、とい

う話が出ていた」などと話すこと、で、「アイデアや良い意見が広がっていく。最後に、「市民と議会の対話を進めていくためにあなたは何ができますか」という問い合わせをする

答えを模造紙に記入。自分のテープ

視化が大事だと感じた。「対話によ

って信頼感が高まっていく。市民の議会に対する垣根を低く、信頼感は高く、をめざしたい」など刺激を受けた様子。また、ある市民は「地域課題の把握に今回の手法を使ってほしい。市民と議員が対話し、議員は課題を構造化していってほしい」と感想を話していた。

「対話」の手法を採り入れた実践が、視化が大事だと感じた。「対話によって信頼感が高まっていく。市民の議会に対する垣根を低く、信頼感は高く、をめざしたい」など刺激を受けた様子。また、ある市民は「地域課題の把握に今回の手法を使ってほしい。市民と議員が対話し、議員は課題を構造化していってほしい」と感想を話していた。

(本誌/千葉茂明)

# 公共の新たなプラットフォームを目指す 京都市未来まちづくり100人委員会



第4期京都市未来まちづくり100人委員会の様子。

## NPOが事務局を運営

京都市未来まちづくり100人委員会(以下「100人委員会」)は、門川大作市長が就任して半年後の08年9月、市長が理念とする「共汗」を実現するための仕組みとして設立された。行政の縦割りを廃し、まちづくり全体について市民の視点で議論・提言・行動する市民組織という位置づけだ。大きな流れとしては、11年12月までの第1~3期と、12年5月からの第4期に大別される。

第1~3期の概要は次のとおり。

第1期(08年9月~09年9月)委員数は148人。参加した市民自らが

提言・行動するための部会を設置し、全体で取り組む行動計画の策定および実践を行われた。

運営面での特徴は、NPOが事務

役割を担つたことだ。プロジェクトチームの取り組み状況を発表する「ミニフォーラム」が行われた。

第2期(09年10月~10年9月)委員数は128人。第1期で取り上げた13の議題を中心に、新規の議題も交えて13の議題チームを編成。行動計画を踏まえてチームごとに議論を深めるとともに、実践活動が始まつた。

第3期(10年11月~11年12月)委員数は131人。議題チームを、より行動しやすいプロジェクトチームに再編し、本格的な実践活動を展開。

その一方、委員会として一体感を持っているよう新たにテーマ別の部会を設置し、全体で取り組む行動計画の策定および実践が行われた。

運営面での特徴は、NPOが事務

## チームで課題に取り組む

委員はすべて無報酬のボランティア。定例会議は原則として毎月第4土曜日の午後に開催された。1~2期は議題チームごとの話し合いが中止だったが、第2期は冒頭30分に、

①福祉・コミュニティ部会、②環境・景観部会、③観光・交通部会、④I